

中學校  
春堂習字帖  
下

283

520

K220.72

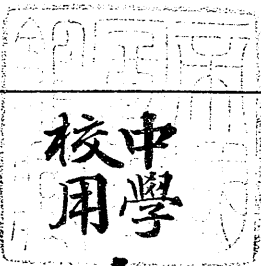
74

3

K220.72

74

3



中學用

# 春堂習字帖

下

六正

15. 10. 16

内交

東京

合資會社  
育英書院發行

一 本書毛筆手本の部の輪廓は從來の手本の形式とちがつて半紙一枚の輪廓を縮めうつしたものですから、その中の文字の位置は即ち半紙面の字配であります。

一 ペン字手本の文字の大きさは、習ふ場合の文字の大きさを示してあります。そのつもりで夫々用紙を選定して下さい。

午牛步師

午牛步師

樂平車東

樂平車東

王主至到

王主至到

去知其真

去知其真

谷  
各  
水  
永

谷  
各  
水  
永

列  
別  
判  
制

列  
別  
判  
制

世老此氏

交茂葉遺

朱來成哉

世老此氏

交茂葉遺

朱來成哉

手數年齡  
承諾

兩方引卒  
再拜

開始思想  
魚鳥

手數年齡承諾

兩方引卒再拜

開始思想魚鳥

友愛發起  
處理

慶賀解散  
約束

盡力計畫  
晝夜

友愛發起處理  
慶賀解散約束  
盡力計畫晝夜



友愛發起  
處理

慶賀解散  
約束

盡力計畫  
晝夜

友愛發起處理

慶賀解散約束

盡力計畫晝夜

報告敬服  
豫備

滿員歸宅  
留守

專門官職  
知識

報告敬服  
豫備  
滿員歸宅  
留守  
專門官職  
知識

健康建設  
投票

周旋實施  
連絡

到達觀念  
勸誘

健康建設投票  
周旋實施連絡  
到達觀念勸誘

以路之由及本應定  
知方里如流就王之  
食多下道可楚河流  
祿之自難為雁其非

字井乃能以木之屋  
ま満第今婦木江天  
何也法能之遊兒之  
志直出之世勢其法

加茂真淵 櫻

うらく  
とのどけ  
きばるの  
こゝろよ  
り  
にほひい  
でたる山  
ざくら花

梅

加茂真淵

うらくとのどけ  
きばるのこゝろよ

にほひいでたる

ざくら花

霞  
こめ  
空  
の  
色

昨  
日

暮きつとおもひごとくに  
四方けしき霧うん空の色  
あのもろくくはるよあそきて  
おぼゆ若菜つみ小松ひこえ

桃の紅  
花の音信

夢  
青葉

新しき年が来るなり梅の花

ちりて鶯老を啼くは柳の緑

桃の紅花の音信ありて

夢の青葉の音ありて



我國の家族主義は家族  
に重きを置いて一族相扶  
けて家が栄える個人を  
軽くして家族を重くする

相倚り

繁榮

親は子に子は親に兄は  
弟は弟に兄はと相倚り  
相助けて家門の名譽を  
繁榮を希ふ

鋤田日當  
午  
汗滴禾下  
土  
誰知盤中  
粒々皆辛  
苦

鋤田日當午汗  
滴禾下土誰知  
盤中粒々皆  
辛

三年  
二宮金次郎

身體髮膚  
受之父母  
不敢毀傷  
孝之始也  
立身行道  
揚名於後  
世以顯父  
母孝之終  
也。

身體髮膚受之父母不  
敢毀傷存之始也立身  
行道揚名於後世以顯  
父母孝之終也

輓近學人  
 益開日進  
 智然レニ  
 ム浮華ト  
 モノ習放  
 縱ノ習漸  
 ク萌シ輕  
 僂詭生ノ  
 佻亦及ス  
 今ニ弊ヒ  
 テ時メハ  
 革メスル  
 ハ或ハ失  
 緒ヲコト  
 セ恐ルト

輓近學術益耳人智日進  
 然浮華枚詭之習漸萌  
 輕僂詭激之風亦生不及  
 今而革時弊也或失墜  
 前緒

月日

高山彦九郎

空

垂葉

秋は夜面白く長月おち  
ろし中の秋は五夜の月乃  
ふと見る夕ぐれのをたおで  
居りて雑木の梢をら  
の垂葉なんどに風すそ  
翳くまらねり

仙客來遊  
雲外巖

神龍栖老  
洞中淵

雪如紈素  
烟如柄

白扇倒懸  
東海天

仙客來遊雲外巖  
神龍栖老洞中淵  
雪如紈素烟如柄  
白扇倒懸東海天

白雲

村田春海

心あふくくく白雲  
ふんふんふん

おははははは

ふんふん  
石とれぬ



富貴不能淫，貧賤不能移，威武不能屈，此大丈夫之謂也。

富貴不能淫，貧賤不能移，威武不能屈，此大丈夫之謂也。

月日  
山田松壽書

雲耶山耶  
 吳耶越耶  
 水天髮髯  
 青一髮髯  
 萬里泊舟  
 天草洋蓬  
 煙橫蓬窓  
 日漸沒  
 瞥見大魚  
 波間跳  
 太白當船  
 明似月

雲耶山耶吳耶越耶  
 水天髮髯青一髮髯  
 萬里泊舟天草洋蓬  
 煙橫蓬窓日漸沒  
 瞥見大魚波間跳  
 太白當船明似月

壽似春山  
千載秀  
德如滄海  
萬年涓

壽似春山千載  
秀德如滄海萬  
年涓

元旦試筆

大石翁之助

夜は川下の方へ流れて曙の光は四邊に満ちてゐる。雞はなほ鳴きつゞけつゝある。空と水との蕃薇色が少しうつらふ。忽ちさらさらとまばゆい光が水にうつる。振返つて見ると、朝日は果てなく今息柵の宮の森の梢を離れようである。折柵その森の壻を離れた鳥が一羽朝日を負うて、さながら曉を告げ渡る神使の如く、凜々たる朝の太氣に羽を搏つて小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々として朝霧の中に眠つてゐる。對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は覺めた。うしろの小屋から煙が立ちよる。今柵を出た家鴨は、足跡を霜につけてくわつくと呼びながら朝日を碎りて水に飛ひこむ。水楊の枝に小鳥が轉る。今起きて来た村人が白い息を吹き、川に下りて河水を掬んで口を嗽ぎ顔を洗ひ、それより遙に筑波の方に向いて掌を合せて拜んで居る。あゝ實に好い拜殿であると思つた。

お後湯水石目白の如く押合ひ海に流る鯉魚の  
まつせうを以て押返し山守は馬廻りくまなく海邊に  
赤痢の怖ろしき夜中になつと熱帯にても虫毛を  
りいさの消夏法よりなまこくはなまぬま家とお前  
朝顔培養を一寸と敷し朝顔くより山の跡と  
白ひ合ひて樂しき日中ハ手づら水を以て弛走し  
暮際には高き月見亭とお手おけなげなうら  
多忙こそ故のなま類をゆく暇もなま程なれば  
暑いとヤ唇ひるしとまきく次第よし

おのるまよでそのく

南香會秋季例會

日時 十月三日午後四時より

場所 麹町區有樂町南香塾

會費 壹圓貳拾錢

出席の有否前日までに南香塾旧  
幹事宛之ハ一報務公トナ

概してこの會の目的は、

於て是下流の海を以て

大體は物のあはれなり

と云ふことである

この會の目的は、

一月五日

ナリ

のぼるは流まほくらん  
流まほくらんに心屋んをそそ

たぐかりとめけ板ぶつたに  
さぬ言よりんつるまば

山のありやたらぬらん  
まふながるまをいらくま

つと汲まきたる 山 梅  
めくるとんまばららふま

み山のまをこよまふびの  
ながるまをすあぬた

岩ふりまをいゆぬの  
あやまつくらる水を

のぼる石も苔むしぬ  
守りたるくらまがわり

くまらぬぬ谷のくまな  
そなたてえいにはちてまぬ

たぐ白妙にいとめくうり  
のぼる椿のくれなぬや

やうに汲まてはらまふが  
車も老んくまくとし

700017

# 中村春堂書



宮田六左衛門刻

大正十五年十月五日印刷  
大正十五年十月十一日發行

著作  
所  
有

著者  
發行者  
印刷者

中村春堂習字帖 全三册  
上中下卷 各金貳拾六錢

中村梅太郎  
東京市牛込區白銀町廿九番地  
合資會社 英書  
代表者 倉田八十八

精興社印刷

發行所  
發賣所

東京市牛込區白銀町廿九番地  
振替口座(東京)七四二番地  
東京市京橋區南橋馬町三丁目  
振替口座(東京)二八〇九番

合資會社  
英書  
目  
育  
書  
院  
店

283  
520



